
第 20 回日本台湾学会 20 周年記念シンポジウム
「新たな世代」の台湾研究

日時：2018 年 5 月 26 日（土）（一日目） 15:10-17:20

場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス YCU スクエア Y404(収容人数 300 名)

主催：日本台湾学会

共催：(公財) 日本台湾交流協会、横浜国立大学国際戦略推進機構

企画責任：川上桃子（アジア経済研究所）、洪郁如（一橋大学）

司会・趣旨説明：川上桃子（アジア経済研究所）

報告・討論：菅野敦志（歴史学：名桜大学）、宮岡真央子（人類学：福岡大学）、赤松美和子（文学：大妻女子大学）、家永真幸（政治学：東京女子大学）

使用言語：日本語（通訳なし）

【趣旨説明】

日本台湾学会は、2018 年に設立 20 周年の節目を迎える。この 20 年の間に、研究対象としての台湾はどう変わり、台湾をめぐる研究の潮流、日本にあって台湾を研究することの意味はどう変化してきたのか。2008 年の学会設立 10 周年大会の記念シンポジウム「台湾研究 この 10 年、これからの 10 年」において提起された課題に、私たちはこの 10 年、どのように向き合ってきたのか。本パネルでは、1990 年代末以降に台湾研究を始めた「新たな世代」の研究者たちの報告を通じて、日本台湾学会の設立以来の 20 年の歩み、および直近 10 年の研究成果を振り返り、今後の課題を考察する。

パネル報告を行う 4 名の会員は、台湾が政治的民主化を遂げ、台湾における学術研究環境の自由化と国際化が急速に進んだ 1990 年代末以降、研究者としてのキャリアをスタートした世代にあたる。この時期は、台湾研究をめぐる様々な禁忌が解け、日台関係の基軸が、植民地統治の歴史文脈を背景としたつながりから、活発な社会交流、文化交流を介した結びつきへと変化した時期でもあった。この「新たな世代」からみた近年の台湾研究の動向の特徴と今後に向けた問題提起をもとに、変化のただなかにある「日本にあって台湾を研究すること」の意義を考える。